

教育実習の報告

教育実習がはじまるまで

文学部文化財学科4年 松田 梨愛果



はじめに

すでに教育実習にむけてなにか取り組みをしている人はいるだろうか。している人はそのまま続けていくべきであろう。一方でしていない人も居ると思う。私もそうであった。事前の指導で先輩たちの教育実習の報告会を聞いた。その感想としては、「先輩たちだからできたのでしょうか」とか「留学とかも行ってないし、自分なんもないな」と不安になった。不安になったからといって特に何かをはじめるといこともなかった。更に実習校といっても自分が通っていた母校で、お世話になった先生もまだ居たので「まあなんとかなるさ」と不安だけで大丈夫という妙な気分でした。

特別支援学校で思ったこと

中学校の免許を取得しようとしている人はわかると思うが、特別支援学校での介護等体験実習が行われる。その体験実習で私ははじめて先生として子供たちと関わった。その時に私は生徒にとって先生の存在がいかに大きいのかということ学んだ。生徒の中では私が言うことや行動はとても大きな影響を与えた。

私が間違ったことを伝えたとしても生徒は疑わずに動く。これはやばいなと思った。私の誤りで生徒が混乱したり、困ったりするのだ。そのことに気づいてから私は特に教科に関する勉強に真面目に取り組むようにした。内容としては、教科書を読み比べたり、資料を買ったり、問題集を解い

たりといったありきたりなことをした。

オリエンテーションまで

4年の5月になって教育実習関係の資料をもらい、いよいよだと思った。私は5月30日から実習が始まるということだったので、資料を受け取ってからの僅かな期間をどう過ごすか考えた。

実習の始まる直前にオリエンテーションという実習校との打ち合わせがある。

みなさんは夏休みに内諾をもらいに実習校に挨拶に行く。そこで担当の先生や授業をする範囲を教えてもらった人は少ないと思う。ほとんどの人がこのオリエンテーションで担当クラスなど詳細を教えてもらうことになる。

また、オリエンテーションは他の実習生との顔合わせになる。その後の実習期間を共に過ごす仲間なのでしっかりと仲良くなっておくとういだろう。

オリエンテーション以降

オリエンテーションの際に生徒指導の先生と指導教諭とで話をした。その時に「生徒にいたらんこと教えるなよ」といった話があった。改めて実習生なのだ実感すると同時に、生徒に迷惑はかけられないなと思った。また同時に、一方で単元の指導計画を実習初日に提出するよう求められた。

それまで私は単元の指導計画を書いたことがなかったもので、書き方がわからなかった。指導教諭からは時間割り、クラス、単位数と最低限の進路速度の指示を受けて後は、同じ実習生に教えてもらいながら作成した。

実習初日に出来上がった上記の単元の指導計画とこれに加えて板書計画を見せ、これらを基に指導をしていただいた。教諭から「この進度で進めると思うか」と問われ「たぶんいけると思います」と答え、いざやってみると上手くいかなかった。計画通りにいけなかったし、授業時間も余ってしまった。

ほんとうにだめだったと思う。そこから指導計画の改善とそれに伴って板書計画の変更をした。

それと同時に教科内容の勉強も加わって、寝るたびに起きたら3週間後の朝になってないかなと思っていました。

最後に

今はまだ教育実習に対して実感がわからない人も多いと思う。ふとした時にハッとなる。それが今ぐらいなのか。4年になってからなのか。または教育実習直前なのかそれぞれだ。ただ実感はなくとも教科内容の勉強はしておいた方がよい。実習中は教科指導だけではなく部活、模試など課外活動といろいろなことをこなしながら授業を毎日行うからだ。そんな中で教科内容の勉強をしようとしても追いつかない。だから、教科内容に関しては特に勉強しておくといい。

みなさんの教育実習が実り多きものとなることを心より願う。

二つの顔

文学部英文学科4年 大橋 健



はじめに

私は、2011年5月30日(月)から3週間にわたって、母校の中学校で教育実習を行ってきた。担当学級(学級活動)は3年2組37名で、朝と帰りの学級活動、給食指導、掃除などを行った。教科は英語を担当し、1年生の2クラスを受け持った。授業は、英語を23回行い、3年2組において、道徳を1回行った。

生徒と向き合うこと

私は、実習に行く前から大学の講義などで「生徒指導」という言葉をよく耳にしていたが、具体的には漠然としたイメージしか持っていなかった。生徒指導=怒られること、というふうにし

かかっていなかった。昼休み等の休み時間に先生から呼び出されるたびに、「また怒られる」ということが重なりネガティブなイメージしか持てなかったと思う。今の、中学生も自分と同じイメージを共有していた。

今回の実習では、担任の先生が生徒指導の担当の先生でもあったので色々な話を聞くことが出来た。その先生は、野球部の顧問でもあり、とても厳しく、中学校に入学してすぐに授業参観で保護者と生徒を体育館に集め、あらかじめ、月に1回もたれる容儀検査の細かい内容をレジュメにして配り、家庭と協力して行うことにより、違反者は少なく、とても落ち着いた学校であった。

その場その場での各先生の判断ではなくあらかじめ決められた内容を提示することにより生徒たちも混乱することなく、学習に励んでいた。また、小さい事件が起きてもほったらかしには絶対にせず、大きな事件と同じように扱い生徒を個室に呼び、初めから叱るのではなく、「なぜそのようなことをしたのか」を聞いてから指導にあたっていた。このやり方は生徒も納得できると思う。

私は中学校の時に、先生に呼び出され濡れ衣を着せられ、一方的にどなられるという経験をした。自分の話は一切聞いてくれず、とても悔しい思いをした。実習先での生徒指導の先生がおっしゃっていたが、中学生といえども一つ一つ具体的に守るべきルールを提示してあげると、素直な時期だからしっかりとまもってくれる。こういうことから、初めから叱り散らすのではなく何故そのような行動をとったのか聞いてあげて、それがルール違反だったらしっかりと生徒を納得させたいので反省させるべきだと学んだ。

指導者という立場から見えたもの

私は生徒との間にいま述べたようなことがとても大事になってくると思う。実習期間は3週間と短い間だったが、その中でも見えた信頼関係が確かにあった。実習前に心がけていたことがあった。

それは、「1日で関わる生徒の名前を絶対に覚える」ということである。

私は実習中毎日、放課後のサッカー部の練習に参加した。その初日、一人の生徒をつかまえては、全員の名前を聞き必死になって覚え、「おまえ、きみ」という呼び方ではなく、名前で呼ぶことによりなるべく近い関係になりたかったからである。

このタイトルに掲げたように、生徒は1日の学校生活の中で様々な顔を見せる。その中で注目したのは、授業での顔と部活での顔である。サッカー部の生徒たちと過ごす時間が長かったのでその生徒に注目していた。授業で様々な学年に行き見学していると、ほとんどの生徒たちは大人しく、「中学生＝発表したい」ではなく、落ち着いていたのがとても印象的であった。しかし、放課後になり部活の時間になるととても元気になりサッカーが好きなんだなと思い、色々指導したいという気持ちになった。一人一人に得意なプレー、苦手なプレーがあり、完璧な選手はなかなかいないと思う。指導者という立場から生徒のプレーを見てみると「その生徒に何が足りないのか」ということがよく見える。

とても恵まれていることに実習の3週間、各週末には大会が開かれた。毎試合で生徒たちと約束事を決めた。「最後まで走りぬく」などのはっきりとしたものである。さらに大事にしたのが、生徒にプレーするうえで自信を持たせることである。試合ではどうしても緊張してしまい、なかなか練習の成果をだすことは難しいと思う。

見事に、3つの大会とも優勝することが出来た。自分が試合にでたくらいとても嬉しかった。生徒たちがうれし涙を流しているのを見て、とても感動した。部活動とは、単にスポーツをするのではなく、仲間とともに努力し色々なことを共有していき、「自分は一人じゃない」ということを学んでいくものだと思う。

終わりに

私はこの実習を通して、教師になりたいという思いがますます強くなった。実習に行く前は正直不安な時もあり、3週間やり遂げられるかわからなかった。しかし、とにかく色々なことをスポンジのように吸収したかったので一生懸命にした。生徒は先生のことをよく見ていてこちらが一生懸命だとそれについてきてくれるということがわかった。今回の実習で反省点やたくさんの課題が見つかったので、それらを次に教壇に立つときの目標にして頑張っていきたいと思う。

実習をひかえている読者の皆さんは、私もそうであったが、近づいてくるたびにだんだんと不安になってくると思われる。それは自然なことだ。自分でしっかりと受け止めて周りの友達とよく話し、不安をため込まないほうが良いと思う。みなさんも、教職に対して色々な決意を持っていると思う。その思いを大事にして、後悔のない実習にしてほしい。

生徒を理解すること

文学部芸術文化学科4年 杉本泰輝



はじめに

私は出身地である岡山県の母校の中学校で3週間教育実習をさせていただいた。

この実習で教師にとって最も大切なことは生徒と真剣に向き合い、生徒を理解することだということを感じることができた。

今回私が実習をさせていただいた中学校は、言葉は悪いのだが、いわゆる荒れた中学校であった。授業中であっても校内を徘徊する生徒が全学年に

居て、授業のない空き時間のある先生方は常に校内を見回り、指導をしているような状態だった。校内をうろつき回っている生徒たちはグループを作り、廊下に座り込んでいたり、一人で行動していたりと様々であった。実習初日で母校のそのような状態を見て、少し戸惑ったのだが、そういった生徒たちにも積極的に関わっていきこうと心に決めた。

美術の授業で

教育実習が始まると、いきなり授業をするのでは無くはじめのうちは、授業を観察することがメインとなる。私もはじめは授業を観察することから始まったのだが、私の担当する教科は美術で、実際に制作をする時間になると机間巡視が中心になり、生徒ひとりひとりに指導することが中心となる。授業観察であっても、その机間巡視の場面になると、私も指導教諭の先生と一緒に指導をさせていただいた。

その机間巡視をする中で、普段は校内を徘徊している生徒A君も美術の授業には参加していた。しかしそのA君は、何もせず、ただぼんやりしている様子だった。そこで制作のヒントになるような資料を持ってきてアイデアを色々と提案してみた。するとたちまちやる気を見せはじめ、熱心に絵を描きはじめてくれた。しばらく熱中して描き続け、絵を褒めてみると、A君は口では「うまくねえよ」と言いながらも、とても良い笑顔をしていたのが印象的であった。

この時、美術の授業の必要性を強く感じた。美術という教科は単に制作や鑑賞をして、その能力を向上させるというだけでなく、心を豊かにする情操教育の面が強くなるということを感じた。少しずつであっても、授業に参加する習慣を身につけさせるには美術の授業はとても有効であると思う。勿論、大半の生徒はきちんと授業に参加しているが、授業になかなか参加することのできない生徒をほったらかしにしているようでは、生徒た

ちの信頼を得ることはなかなかできない。そういった生徒とも向き合いながら、すべての生徒たちに平等に接することが大切であると感じた。

教師は伝えるプロ

中学生という思春期には時として学校で問題行動を起こすことも多々ある。その難しい時期の生徒たちと接することは簡単なことではない。私もその難しさを3週間という短い間に痛感した。

ある日、担当しているクラスの生徒たちと給食を食べ終わり、教室で片づけをしている最中に一人の生徒B君がタバコを吸いながら廊下を歩いている姿が目に見え飛び込んできた。すぐにそのB君の元に駆け寄り、タバコを消すよう注意したところ、B君は反抗して私につかみかかってきた。近くにいた先生方と数人で指導し、なんとか落ち着かせることができたのだが、私自身そういったトラブルになってしまったことにとっても落ち込んでしまった。もっと違った言葉で注意すればよかったのではないかと色々悩んだ。

放課後に担当クラスの先生に相談したところ、「たとえトラブルになったとしてもしっかりと大人としての規範をみせることは大切なことだ」と言われた。その言葉にとっても救われたのと同時に、自分の力の無さを痛感した。

問題行動を繰り返す生徒は、自己肯定感が低い生徒の一人であることを忘れず、厳しくも温かい指導が必要だと気付いた。何でも頭ごなしに注意するのではなく、生徒になぜいけないのかをきちんと伝えなければ意味がなく、教師は喋るプロではなく、伝えるプロであるということを感じた。生徒の思いをとらえ、生徒を理解しなければ生徒たちに伝えたいことも伝わらないのである。

おわりに

私は3週間の教育実習で、朝から晩まで休む暇もなく働く先生方の姿を見て、改めて教師の仕事量は膨大であると感じた。その忙しさの中でも、現場の先生方は熱意を持って生徒と向き合い、そ

してよりよい授業をするための努力を日々続けている。そのような先生方の姿を見て、私は教育実習に行く以前よりも更に教師という職業に魅力を感じた。そのことにより、今までぼんやりとしてしか考えていなかった教師への道を強く希望するきっかけとなったのである。

教育実習では、授業を行う為の教材研究や実際の授業、生徒とのコミュニケーションなど、とても苦勞することが多い。しかし、目標を持って真摯に教育実習に取り組めば必ずや、その成果を得ることができるのである。

後悔のしない教育実習にするためにもこれから今自分に出来ることを少しずつでも取り組んでいって欲しい。そして、皆さんの教育実習が実りあるものになることを私は心から願っている。

教材研究の大切さ

文学部史学科4年 福山朝哉



1. はじめに

私は、6月6日～17日まで母校で教育実習に行ってきた。配属されたクラスは1年生で、1組～4組の世界史の授業を担当する事になった。私の授業実践の回数は30回と、高校の2週間の実習としてはかなり多い。このように多く授業を行えたのは、1日に4クラスから3クラス授業を行った為である。また、同じ授業を4回行えたので、授業の反省や教材研究の反省もかなり出来た。

授業を行うにはしっかりとした準備が大切である。私も、実習中は張り切って教材研究をかなり深く行った。しかし、教材研究にばかりに目を向けて、授業で失敗も多く繰り返した。教育実習を

終えて感じたのは、教材研究は深くやればいいのではなく、「しっかり」教材研究を行うのが大切だと感じた。何故、そのように感じたのか。

2. 教材研究の行い方

授業を行うにはしっかりとした準備が必要だ。その為には、教材研究をしなければならない。では、皆はどのように教材研究を行っているのだろうか。

教育実習に行くまでの私は、「教科書に載っていない知識も多く学ぶ」ことを中心に考え、実習中もそのように行った。実際に私が担当したのは、中国の歴史で殷～三国時代までの範囲であった。最初の殷の時代の授業では、殷の文化や生活の事など教科書に載ってない事を沢山調べ、授業でも生徒に私が調べた事を沢山話した。生徒の反応が良かったので、私も手ごたえを感じたりしていた。しかし、指導担当の先生から「内容は面白かったけど、教科書の内容が印象に残らなかったよ」と言われてしまった。殷時代の授業を生徒にも思い出させてみると、教科書の内容ではなく私が調べた事の内容を答える生徒が多かった。つまり、「教科書に載っていない知識も多く学ぶ」という事をしていた私は、知らず知らずに教科書の内容を蔑ろにしていたのである。

授業は、教科書の内容を生徒に学んでもらうのを目的としている。だから、私のような教材研究のやり方では、その目的に沿わなくなってしまう。指導の先生からは、「まずは、教科書の内容を学ぶ」と教えられた。他の先生達の教材研究を見ると、皆教科書をしっかり読んでいた。

教材研究のやり方は、人によって様々であるが、「教材研究の始まりは教科書から」というのが基本だと私は考える。

3. クラスを理解するのも教材研究の一つ

私が、授業を担当したのは1年1組～4組であるが、1組・2組は進学クラスで3組・4組は普通クラスというコースに分かれていた。そのせい

もあって、教科の習熟度は進学クラスと普通クラスで差が大きかった。中国の歴史の授業をしている、漢字の理解度の差が大きく、1・2組で理解できた漢字も、3・4組では「何て読むの?」という質問が来て、授業の進み具合に差が出てしまった。

指導の先生には、クラスの学習レベルに合わせて教材研究を行うようにと言われた。例えば、しっかり教材研究を行っても、生徒から熟語や慣用句の質問が来たりもする。そうしたクラスだと教材研究のやり方も変わってくる。担当するクラスの学習レベルを理解するのも教材研究の一つである。

私の場合、普通クラスである3・4組の授業の教材研究では、難しい漢字や慣用句も調べていた。このように、クラスによっても教材研究のやり方は変わってくると思う。

4. 教材研究の陥りやすい罠

ここでは、先に述べた「教材研究は深くやればいいのではなく、「しっかり」教材研究をするのが大切だ」と話した理由について述べたい。

授業には50分と時間が決められている。その中で、生徒が理解するように授業を行わないといけない。「授業が始まってこれを話す。この話になったら生徒に質問をしてみよう。終わりには、プリントの問題を解いてもらおう」というように、計画をたてる事を授業計画というが、授業計画を立てるにはしっかりと教材研究を行っていないとできないと私は考える。理由は、授業の内容を理解していないと計画を立てられないからだ。

教材研究を行うときに陥りやすい罠が存在する。それは、情報が多くなりすぎて生徒に伝えるべき内容が見えなくなってしまう事である。

私も、教育実習中はこの罠に陥っていた。というのも、教材研究をどんどん進めていくと話したい事がどんどん出てきて、とても50分で収まる内容にならなくなってしまう。そうすると、実際の

授業ではどうなるか。まず、50分で授業が終わらない事がある。もう一つは、先生の独壇場で生徒がただ聞くだけしかできなくなる事になる。こうなると生徒は、授業を聞いていない。そもそも、「聞く」とは自分が話して相手が相槌等の反応があって「聞く」という事になる。

どの話が生徒は興味があるか。どの話は生徒は興味がないか。教材研究をする上でこの事を意識してほしい。なにも考えず、ただ教材研究をしただけでは、生徒に印象が残らないだけでなく、つまらないという印象を持たれる恐れがある。せっかく沢山調べて教材研究を行っても、生徒に印象に残っていないのは本当にもったいない。こうした危険が、教材研究をする上で潜んでいる。

では、そうならないようにするにはどうしたらいいか。それは、情報を取捨選択する事である。さほど重要でない内容は切り捨てるのも大切である。もうひとつは、教科書の内容から逸れないこと。生徒に理解してもらいたい内容は、教科書に書かれているので、教科書の内容をしっかり吟味して話す内容を決めてほしい。最後に、生徒主体で考えること。先生が話したい事を話して授業を行うと、先生は満足するだろう。しかし、生徒がきちんと理解したかとなるとそうではない。教材研究や授業計画を行うなかで「生徒が面白いのか。生徒が理解しやすいか」等を常に考える事が大切である。こうした事を、意識して教材研究をすれば、きっと罠に陥らないと思う。

5. おわりに

教材研究は、授業の基本となるものである。それをおろそかにしてしまうと、授業もうまくいかないだろう。

忘れてはならないのは、教材研究や授業計画を行う際に常に生徒の事を考えることである。教材研究や授業の準備に迷っていても、生徒の事を考え、生徒の思いやりがあれば、教材研究の方法や授業の準備のやり方も見えてくると考える。

授業実践

文学部史学科4年 徳丸 知都香



1. はじめに

私は、母校の中学校で3週間、実習をさせていただいた。教科は社会科である。担当学年は1年生で、授業は5クラスを受け持った。2週目から授業実践をし、計18回授業を行った。教育実習前に、模擬授業の会で3回授業をしていたため、イメージはなんとなくではあるができていた。中学生の前で授業するのがとても楽しみだった。

3週間の教育実習で、教師の仕事、実際の教育現場がどのようなものか学ぶことができた。教育実習終了後には、教師になりたいという気持ちもさらに強くなった。

2. 授業実践にあたって～授業観察～

学習指導案の【生徒観】には、「このクラスはこういう雰囲気なので、こういうところに気をつけて、こういう授業をしよう。」ということを書く。クラスの実態を知るといのは授業実践において大切なことである。そのため、授業観察ではクラスの実態を把握するようにした。そこで一番感じたことは、同じ雰囲気を持っているクラスはないということである。同じ単元を授業するときには、それぞれのクラスに合った授業を考えなければならない。片方のクラスでは盛り上がりつつもう片方のクラスでは盛り上がらないことが起こり得るからだ。だから、授業観察の際に、積極的に机間巡視をし、生徒の様子を見ることをすすめる。

もちろん、先生の授業の仕方というのにも観察し、いいところは真似る。先生だけではなく、同じ教育実習生の授業を観察することも勉強になることが多い。同じ教科はもちろんのこと、他教科の授

業観察でも吸収できることは多い。授業観察はただ観ているだけではなく、自分が授業しているときをイメージすることも大切である。

3. 授業実践

私は、実習7日目に初めて授業を行った。しかも、初日にもかかわらず3回も授業を行った。また、多い時で1日5回、授業を行ったこともあった。私の授業スタイルは、板書形式で教科書は時間が余ったときだけ読ませる。主に資料集を使って授業を進めた。

①生徒の心をぐっと引き寄せる

初めての授業が、朝一発目。生徒たちもやる気がないだろうと思いながら教室に入った。ところが、生徒達は私に興味津々だった。初回の授業で大事なのが、生徒の心をぐっと引き寄せることだと思う。そこで、生徒達にアンケートを取った。「歴史は好きか」「なぜ、好き(嫌い)か」「私への質問」の3つだ。生徒達が歴史に対してどう思っているのかを知りたいのが一番の目的だが、私への質問を入れることで生徒達と少しでも近づくことができたらしいと考えた。中1の6月というのは、ほとんど小学生と似たようなもので、私への質問もプライベートな質問ばかりだった。しかし、これらの質問には、授業中にできるだけ答えていった。そうすることで生徒達と信頼関係を築こうと思ったからだ。実際に、質問の答えをしていくとクラスも盛り上がった。

初日の授業実践で学んだことが、「生徒がいて初めて授業が成立する」ということだ。授業中生徒にたくさん助けられた。私の発問に返してくれることで授業も進んでいく。発問によって盛り上がりも変わる。授業展開を考えると、「もし自分がこの授業を受けたらおもしろい授業になるか」と考えてみると良いだろう。

②発問の仕方

授業実践を重ねることで自信もついてきたが、完璧な授業というのはなかなかできないものだ。

私が特に苦戦したのが、「発問」である。発問というのは授業の流れを左右するものだ。中学生はとにかく“素直”で思ったことをなんでも言う。問題は、それが的外れな答えだったときに、どうフォローして答えへ導くか。教師の力量が問われるところだと思った。自分の頭ではわかっており、生徒にも伝わるだろうと思っていたのに、伝わらないことが多々あった。その瞬間頭が真っ白になったことを今でも覚えている。

指導教諭に「社会科では、知識・理解を問う発問ではなく、思考・判断力を養う発問にすることが求められている」と言われた。つまり、『なぜ、どうして』という発問だ。特に歴史については、それぞれの事象には、それぞれの背景がある。その背景を、ヒントを与えながら生徒に考えさせることで、生徒も頭に入るといふことだ。これは他の科目でも言えることだと思う。発問1つで授業の流れが変わることを覚えておくとうまいと思う。

4、最後に

「授業は実践がなによりの勉強」と指導教諭に言われた。教材研究や学習指導案作成も必要なことだが、教師は“授業”が勝負だ。授業ひとつで生徒は先生のイメージを作ってしまうものである。毎回の授業をしっかりと反省して、次につなげるような授業をしていくと、よりよい授業になっていく。

「学生」「教育実習生」といえども、生徒から見たら「先生」である。不安でいっぱいではあるが、自信を持って堂々と授業実践に臨んでほしい。生徒達は自信がないとすぐ見抜くので気をつけていただきたい。2週間、もしくは3週間という貴重な教育実習、自分がやりたいことを存分にしたいと思う。

最後の最後に、教育実習の予行練習にもなるだろうから、事前に模擬授業の会で授業を試してみることをお勧めする。

教員集団と私

食物栄養科学部食物バイオ学科4年 有 銘 盛志郎



はじめに

私は沖縄の母校で実習を行い、1年生の2クラスの理科を担当させていただいた。

実習の形式は担当の先生方が2人ついていただいた。また一方で、理科の授業以外のクラス担任は1週間ごとに違う学年を受け持つという形がとられ、これは別の実習生とは異なる形式であった。クラスが変わることに関しては「生徒たちの1年ごとの成長をみてもらいたい」という配慮であった。

先生方との関わり

私の2人の担当の先生はそれぞれ理科を受け持っている先生で、長年教師を続けている先生と、臨時教員を続けている先生であった。準備室には別に現役で採用試験を合格したばかりの初任の先生もいらっしゃったので、それぞれ違った意見を聞くこともできた。

主に指導についていただいた先生は臨時教員を続けている先生で、実習打ち合わせの段階で、「自分がやりたい授業をやってください」ということで、教科書の範囲を指定し、授業形式や流れ等は全て私にまかせていただいた。

この指導教員の指導方法により私が授業でやってみたかったことをすることができ、さらに各授業の反省を含めて、試行錯誤をしながら授業に臨むことができた。しかし、最初の授業では中学生の雰囲気によって圧倒させられて、生徒を自分に向かせることが出来なかった。「自分がやりたい授業」を行うことができなかったということである。

その後、2回目、3回目と授業を行うごとに、

50分という授業時間と、クラスの雰囲気慣れてきたが、なかなか生徒を自分に向かせることができなくて悩んでいた。

同じ教育実習生であった友達に相談しても、その友達は3年生を受け持っていたので1年生と比べると比較的落ち着いていたため、私が欲しかったアドバイスはなかなかもらえなかった。

そこで、歳の近い現役で採用試験を合格した初任の先生に相談したところ、「声のトーンを変えて叱ってみる」「あえて黙って生徒をまつ」など、「何で先生が怒っているのか、何で授業を進めてくれないのかなど生徒自身に気づかせる事が大切だよ」というアドバイスをいただいた。

長年教師を続けている先生からは、「どのようにしたら自分がやりたい授業を実践できるのか」という問いかけが多く、「実験準備をしっかりとしておく」「生徒の反応に気づいてあげる」「どのように注意などの指導を行うか考える」など具体的なようではないアドバイスをいただいた。最終的には自分で自分なりの指導方法を考えるしかなかった。

3人の先生方に共通していたことは、「自分の考えはこうだけど、もっと他の先生方の考えも参考になるよ」とおっしゃっていたことである。

そのおかげで、他教科、他学年の先生方にアドバイスを求めに行き、それぞれの先生方の考えを学ぶこともできた。

授業外での先生方との関わり

先生方の仕事終わりの雑談もすごく為になった。3年間の中学校生活では想像もできなかったまったく知らない空間で行われており、そのため新鮮であった。

ある先生は「仕事で嫌なこと、つらいことが10あっても、1つでも生徒との間で嬉しいこと、感動することがあると、嫌なこと、つらいことが忘れられる。だからこの仕事はやめられない」とおっしゃり、またある先生は「どんなに授業中うるさ

くて憎たらしく思っても、ふと思うとその子供たちがかわいく感じてしまう自分がいるから仕事を続けてしまう」とおっしゃられていた。

先生方は何かしら自分自身で楽しみをもって仕事をしていることを話してくれた。実際私も授業、学級活動などを通じて生徒たちと一緒に過ごす事で、大変だけどどこか楽しい、やりがいがあるかもしれないと感じていた。

その他にも、他教科、他学年の壁も関係なく、先生方は互いに自分の意見や相談を持ちかけており、生徒との問題、生徒自身の問題をどうにかして解決しようとする姿勢が見られ、とても感動した。

おわりに

この教育実習で先生方同士のつながりの強さを最も学んだ。

当初は自分自身の考えを貫こうとしていたが、なかなかうまくいかなかった。自分自身が1歩引いてみて他の実習生であったり、先生方の意見を聞いたりしてみるのも参考になるかもしれない。

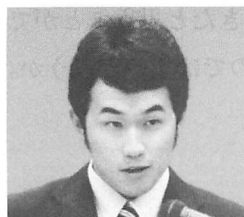
そのためには自分から進んで、アドバイスを求めにコンタクトを取り、自分のものとして受け入れること、自分から学びに行くことが大切であると考える。

教員志望で大学で勉強してきたが、就職に心揺れたりもした。しかし、教育実習に行ってから、現場も体験し生徒たちと触れ合うことで更に教員になろうとする気持ちが強くなった。

自分の足りないところ、勉強不足なところ、まだまだ頑張らなければならないことはあるが、この教育実習で改めて教員を目指そうと強く思ったことは確かである。

生徒たちと一緒に

文学部史学科4年 甲 斐 浩志郎



はじめに

教育実習が始まる直前、私は不安もあったが、それをはるかに上回る期待があった。中学生のときから夢見ていた「教師」というものへの第一歩が踏み出せると思っていたからである。模擬授業ではなく、実際の中学生と本当の授業をするということは不安であり、楽しみでもあった。

この実習で現場レベルの授業に少しでも近づこう。生徒一人一人に対して親身に接し、生徒のことを理解するのはもちろん、私のことも少しでも理解してもらおう。そうした目標をもって実習に入っていった。

先生方との関わり

担当の先生は私と同じ立場に立ってくださり、とても話しやすく、教育現場について先生にも有給休暇があること、授業のコツ、教員採用試験のことなど様々なことを教えて頂いた。さらに、生徒の性格や学習の程度についても教えて頂き、現場の先生は生徒のことをよく見ていて、授業にもそれが活かされていることに、とても驚いた。また、先生からの情報は私の生徒理解にとっても役立った。

日誌を書いたり、授業研究をしていたりすると、いつの間にか夜になっていることもしばしばあったが、夜の職員室での先生方の会話を聞いていると、生徒の話や部活の話、笑い話など先生の素を見ることができた気がする。生徒だったときの職員室の緊張するイメージから、楽しいところというイメージに変わり、私は控室にいるより職員室にいることが多くなった。次の日に生徒に接す

る先生方を見ると、前日が嘘のようで、先生方もオンとオフを使い分けているのだなと思った。

生徒理解

私が実習を行った中学校は私の母校であり、剣道部のコーチとして練習や遠征に参加していたり、去年まで弟が在学していたりしたこともあって私のことを知っている生徒も多かったので、その生徒からのつながりで生徒の顔と名前を覚えていった。もちろん、授業実践の際には席に合わせた名簿をつくったり、廊下などで会った時には必ず一言会話したり、どうしても名前を覚えられないときは本人に聞いたり、様々なことを試しながら生徒理解に努めていった。

授業実践

事前の打ち合わせの段階では最初の一週間は授業観察にあてて、授業実践は6回ということであったが、私は本気で教師を目指すために、たくさん授業実践をしたかったので、先生にお願いし、20回ほど授業実践をさせて頂いた。20回以上の授業を行うために、私は実習4日目から授業実践の機会を頂くことができた。

部活動の指導

私は実習期間中、剣道部の指導をさせて頂いた。今まで長期休みの間、練習にお邪魔していたこともあり、生徒たちは自然に迎えてくれた。中体連前ということもあり、生徒たちはとても熱心に練習に取り組んでいて、私の指導にも真剣に耳を傾けてくれた。監督の先生が練習に行けないときには私に練習の指揮をさせて下さり、監督になった気分になることができた。中体連では個人戦優勝者を出すことができ、その他の生徒も普段以上の力を発揮してくれ、私の指導が少しでも役に立ったかなと思う。この実習で、またいつか剣道部の監督として生徒を指導したいという気持ちがさらに強くなった。

生徒たちと一緒に

3週間の教育実習は授業研究に追われ、とても

大変だった。しかし、生徒とのコミュニケーションや先生方とのやり取りなど、大変さ以上の楽しさがあった。授業も最初のプリントと研究授業のプリントを見比べると文章が減り、絵や写真が増えた生徒主体のプリントになっており、成長したことが目に見えてわかったように思う。

授業をしていく中で、中学校の授業は先生が説明するのではなく、生徒への発問を多くし生徒自身に考えさせることが大切だということが分かった。先生の説明が多いと生徒の集中力は続かず、生徒は飽きてしまう。そこで、発問から会話を始めて、生徒との会話のなかで答えに導くような授業が良い授業だということを学ぶことができた。

実習のすべてにおいて、生徒と一緒に汗をかいて、一緒に笑って、一緒に学んで、一緒に喜ぶのが実習の楽しさであり、難しさでもある。生徒との関係を構築するには苦勞したが、生徒に私の意図が通じたときの喜びは、これ以上ないほどのものだった。私は、この実習で生徒たちと一緒に授業をつくっていく楽しさを知り、教員になりたいという気持ちが一段と強くなった。

この教育実習でお世話になった先生方や生徒たちなど様々な人たちに感謝し、また教壇に立てるように、この実習で学んだことを活かし、自分を高めていきたいと思っている。

教育実習をひかえた皆さんへ

教育実習をひかえた皆さんは今、どんな気持ちだろうか。不安な人もいれば、楽しみな人もいるだろう。両方という人もいるかもしれない。教育実習は確かに体力的にも精神的にも大変なものである。しかし、一生懸命にやっていたら生徒は応えてくれる。発問にも答えてくれるようになり、向こうから話しかけたりもしてくれる。生徒たちは意外と実習生に対して興味を持っているものである。

授業については、授業はたくさんやればやった

だけ上手くなる。最初から完璧な授業ができるはずはないし、そんなことは求められていない。実習が始まる前に友達などと一緒に実践の練習をしておく、いざ生徒たちを前にしたときもだいぶ違おうと思う。最初の授業と最後の方で行う研究授業とを見比べて少しでも成長できたと思うことができれば、教育実習は大成功なのではないだろうか。

